

子ども食堂ネットワークとのタウンミーティング

2018.9.28（金） 19：30～21：15

緑が丘 G - Hills

○参加者 市民 25 名

○タウンミーティング議事録

●子ども食堂ネットワーク 代表 あいさつ

- ・市長を囲んで子ども食堂のことについて話し合える機会を頂戴したことに感謝している。今日は自由に何でも話してほしい。どんどん質問して、市長にもどんどん答えてもらいたい。

●市長あいさつ

- ・今年度 10 回目のタウンミーティングである。
- ・日本でも能美市でもいじめや不登校の問題はある。その要因のひとつに愛情不足が挙げられる。市内小学校の先生は入学してくる子どもたちを見ると愛情不足かどうかかわかると言っていた。特に 0～2、3 歳までの間、愛情不足だと大きくなった時に影響を及ぼすと言われている。この間にしっかりと愛情を注ぐことが大切である。
- ・先日のみ子育てネットワークの会で、ある実験のビデオを見た。赤ちゃんがしたことに対して母親が何か反応すると、喜んでまた何かをしようとしていた。しかし母親が無表情・無反応だと、泣き出してしまっていた。また、おとなしい子は小さい時に愛情不足だった可能性が高い、赤ちゃんは親が無反応だと、次第にあきらめてしまうという話を聞いて印象深かった。
- ・小学校に入る前に愛情を注いでいくことが大切ということで、能美市では保育園と小学校・中学校が連携して、子どもの情報を連綿とつないでいくようにしている。
- ・能美市では子育てに関する教室やイベントを実施しているが、愛情不足になる子どもやその親はこのような教室等に参加していないのではないかなと思う。子供に愛情や関心がある親は積極的に参加していると思う。参加していない人に参加してもらえそうな仕掛けを考えている。
- ・子ども食堂では、いろんな成果・課題があると聞いている。子育て環境の整備においてハード面だけでなくソフト面においても力を入れていきたいと思っている。忌憚のない意見交換をしていきたい。

●司会

- ・子ども食堂について

誰でも、子どもがひとりでも安心して来ることができる無料または低額の食堂

いっしょにご飯を食べておなかいっぱい満たされて、おなじ空間で過ごすことが大事

→居場所づくり、非認知能力（意欲・やる気・コミュニケーション能力）の形成、子どもの健全な育ちの環境へ寄与する

能美市子ども食堂参加者数（8回開催） 子ども 835 人、大人 690 人、合計 1,525 人

子ども食堂がつなぐもの・・・

①思い：子ども食堂をやりたい・子どもが健やかに育って欲しい

②人：子ども同士、子どもと地域の人・協力者

③社会（資源）：お店や施設

●意見交換

【大テーマ】 子どもの健やかな成長のために私たちは何ができるか？

1、あなたにとって、子ども食堂に関わる意味は何ですか？（関係性・動機など）

（市民）

- ・子ども食堂は人がつながる場所として有効である。
- ・大人達がつながることで、地域の子どもの安心を下から支えることができる。
- ・来る子どもたちの顔を見たい。

（市民）

- ・親子の場所づくりとしてやっている。
- ・子どもの居場所を提供する目的だったが、始めてみると親子で来て、親同士でつながっている。親にゆとりが生まれ、子どものために時間を使えるという声もある

（司会）

- ・三道山の子ども食堂（障害児とその家族を対象にした子ども食堂）に行っている人は、子どもをずっと見ていなくても安心していられると言っていた。

（市民）

- ・子ども食堂をやってみると、子どもの笑顔を見ることができ、役に立っていると感じられ、満足を得られた。子どもたちによって我々も育てられている。
- ・子ども食堂の様子が写真と共に新聞に取り上げられ、それを見た保護者から「子どもの笑顔を見ることができた」とお礼の電話があり、うれしかった。

（司会）

- ・保護者や学校の先生からは家・学校にいるときとは違う子どもの表情が見られるとの声があった。

（市民）

- ・子どもの笑顔がいい。自分も子育てをしているが、親が笑顔だと子どもも笑顔になり、

親が怒った・つらそうな顔をしていると子どももつらそうな顔をしていると思う。笑顔でいられる環境が良いと思う。

(市民)

- ・人間の本当の幸せだと思う。
- ・すべての子どもたちが大人になれるような世の中を目指せたらみんな幸せだと思う。

(市民)

- ・(子ども食堂会場のひとつである) G-Hills の管理をしている。G-Hills は「共に生きる」をコンセプトにしている。どう地域と一緒に変わっていくのかということを大事にしている。
- ・子ども食堂の開催を実現でき、子どもの居場所・コミュニティを作ることができた。子どもたちが経験したことがないことをこれからも提供できると思った。やってみて自分たちもうれしく思った。

(市民)

- ・5年ほど関東に住んでいたが、隣に誰が住んでいるかわからなかった。そこでは子ども食堂の話題も聞いていた。コミュニケーションがない地域では必要性が高いが、地域のつながりがわりとある能美市で子ども食堂は必要なのか疑問に思っていた。しかし能美市でもアパートが増え地域に誰が住んでいるのがわからない状況になってきている。よく知っている人もいるが、全く知らない人がいる。誘われて子ども食堂に行ってみたが、誰もが安心して集まれる場所があったらいいと思った。これからも関わって行こうと思っている。

(市民)

- ・自分は子育てについては反省ばかりだった。生きていくこと、自分のことで精いっぱいだったと思う。若いお母さんを見ていると余裕を持って子育てして欲しいと思った。何か協力したいと思い子ども食堂に関わっている。
- ・子ども食堂では自分がどう動いたらいいのか考えている。自分が育てられていると感じる。自分も居場所・役割を探している。

(市民)

- ・中学生の子どもがいて、その友達に毎日孤食の子がいる。それを聞いて子ども食堂をやりたいと思って始めた。子供たちはいい子でお腹が満たされたら笑顔で帰っていく。今の課題は親への教育だと思う。

(司会)

- ・一週間で何回、家族全員で夕食をとっているかというアンケートを取ったところ、一番多かったのは7回、その次が0回であった。環境が二極化している。0回が悪いわけではないが気になる結果である。

(市民)

- ・三道山の子ども食堂に参加している。子ども同士が、障がい者と健常者が分け隔てなく同じ場所で楽しい時間を過ごせることがいいと思った。
- ・医療的ケアの必要な子どもがいるが、外出時は周りを気にしてしまい、制限がある。子ども食堂へ連れて行くと、子ども同士の触れ合いが見られる。違う表情が見られる。
- ・親も子どもから離れても、安心していられる。他の親と話もでき、居心地がいいと感じている。

(司会)

- ・子どもを連れてこず、親だけきたこともある。それだけ居心地がいいと思ってもらっている。

2、子ども食堂に関わって、子どもに何を感じたか。(こんな話をしていた・見た)

(市民)

- ・子ども食堂に不登校の子どもが2人来ていた。1人は明るく元気で、人懐こく話しかけてきて、いい表情をしていたが、一月以上家を出たことがない子だった。学校だけが居場所じゃないと感じた。子ども食堂がこの子にとって居心地のいい場所になればいいなと思った。
- ・もう一人の子はフードを被り、マスクをして壁際でスマホをいじっていた。先生に安全な場所だからと言われて連れて来ていた。しかし、その子の横に行き、話かけても拒否はしなかった。人との関わりをもちたい、もてる子だと思った。

(市民)

- ・大人が元気になる。親は料理を作らなくていいので、時間と心に余裕ができて子どもに優しくできるという印象がある。親が優しいと子供は元気になる。親にゆとりがあると子供たちものびのびとできる。
- ・子どもたちが楽しそうなのは、親がニコニコしているからだと思う。子どもにやさしくできる大人がたくさんいる場所で過ごすことは子供にとっても良いと思う。そんな場所が増えればいいと思って参加している。

(市民)

- ・近所のおばあちゃんが何とか子供を助けたいと言っていたことがきっかけで子ども食堂

を始めた。地域の大人の背中を見せる事は大事だと思う。子供たちは純粋である。友達とお腹いっぱい食べて帰って、次の日は頑張れる、そんな場所をつくってあげたい。親は大変、仕事に家事があり、余裕がなくなると子供たちがつらくなる。地域として解決する力が必要だと思っている。おばあちゃんたちの生きがいにもなっている。

(市長)

- ・子ども食堂という言葉聞いて、単身赴任の子、栄養不足の子のための場所という先入観があった。実際には中学生がたくさん行っており、その中には不登校の子もいて、その子が元気づけられていた、いきいきしていたという話をきいていたが、その理由がみなさんの話を聞いて分かった気がするが、他にも何か魅力があるのだろうと思っている。

(司会)

- ・スクールカウンセラーも参加している。その人に、大人は何かしてあげたいと思うがまずは子どもの話を聞いてほしいと言われた。それを心がけている。

(市民)

- ・子どもたちにとっては家でもない学校でもない、誰にも何かを求められることもない、自分を出せる場なのかなと思う。たくさん食べる子もいるが、家で一人だとそんなに食べないと思う。素の自分を出せる・ゆっくりできる場所が必要だと思う。大人が制限しない、かつ一人ぼっちでない場所ができるといいと思っている。

(市民)

- ・G-Hillsで行われた子ども食堂を見学した。高齢者と子どもが一緒にいるところが今までにない夢のような場所であり、続いたらいいなと思った。
- ・また、三道山の子ども食堂にも誘ってもらって、子どもと関わるのが楽しみといった軽い感覚で参加した。受付をしたが、見守るということに楽しさを感じた。子どもたちがゆったり過ごしている様子を見ることができてよかった。

(市民)

- ・3人の子がいる。子育てに関しては、反省すべきことがたくさんある。
- ・子ども食堂の立ち上げを手伝ってほしいと言われ、自分には何が出来ることがあればと思い参加した。障害のある方を誘ったら喜んできてくれた。そこにきた子供たちが障がいのある方と積極的にコミュニケーションを取ろうとしているのを見て、やってよかったと思った。

(市民)

- ・誘われて参加した。自分ができることはハード面で支えていくことである。子どもが喜んでいる様子で自分が癒されている。
- ・子どものうちにのびのびできることで、大人になって自分をコントロールできるようになってくると思う。

(市民)

- ・大成で行っている子ども食堂に参加した。子どもは子どもである。この会場は子どもより大人が多く親子で来ている人もいた。子ども同士だけでなく、子どもと大人でもコミュニケーションをとっている姿を見て、笑顔になれた。よかったなと思った。

(市民)

- ・辰口の子ども食堂で見学をした。ある企業に勤めていたが、企業として社会や地域に関わることができるのかと思って足を運んだ。
- ・子どもたちは靴をそろえるなどマナーがいいなと思った。子ども達がそういう点を学んでいるところがいいと思った。

3、10年後の子育て環境どうであってほしい？こうなったらいいな、これ大事だと思う

(市民)

- ・子ども食堂に参加した子で、友達や大人と触れ合って、愛を感じて楽しかったという小学1年生の男の子がいた。それを聞いてやる気になった。
- ・子ども食堂は世代、障がいの有無も関係ない。お世話する人・される人の境もない。お世話する人も満足できる。
- ・高齢者の居場所にもなり得ると思う。広く地域に広まればといいと思う。自分の家を住み開きしてもいいと思う
- ・能美市は行政もボランティアも頑張ってきたので何でもそろっていると思う。そろっているからこそ見えないもの、行き届いていない人に気づくことができるようになればいいと思う。

(市民)

- ・子ども達が沢山食べるので米が尽きたこともあったが、どこからかうどんが出てきたこともあった。子ども達は純粋で、それを失わないで欲しい、壊さないようにしていきたい。
- ・子ども食堂を始めて1年ほど経過するが、お世話する大人達にだんだんと自我ができて、いろいろな思いが出てくるが、違いを認めることが大切だと思う。

- ・市長には、辰口の子ども食堂も見に来ていただきたい。これからも続けていきたいと思っている。

(市民)

- ・大人がみんな仲良しで地域みんなにつながっていること。それを子供に見せることで、子ども同士も仲良しになる。いじめもなくなると思う。大人が子どもに見本を見せるべきである。

(市民)

- ・子どもの力を大人が決めてしまわず、子どもの力を信じる。失敗も恐れず体験をさせてあげるそういう地域、能美市でありたい。大人も力を発揮して、自分を信じて、お互いを認め合えるようになってほしい。

(市民)

- ・社会全体が忙しい。スピードを競い、点数に目が行ってしまう。それを変えたい。30年前くらいの大人の価値観・態度に戻ってほしい。その頃は、今ほど子どもに気を使っていなかった。ありのままの大人の感情をさらけ出していた。子どもはスピードでも点数でもない大人の芯を見て安心して育っていた。子どもに気を使って、守って、手を出してしまうようでは、子どもは育たない。子どもを信じてほしい。
- ・子ども食堂は、手も口も出していない。自由にさせているところがいいと思う。

(市民)

- ・今子ども食堂に行っている子どもたちが、10年後に懐かしい、大きくなったなど、たわいもない、10年前の話もできる場所があればいいなと思う。いろんな人がいるといことを認めることができる大人になってほしい。
- 自分は子育てに精いっぱい、子どもからは怖い親と思われるかもしれない、食事の時間が合わず孤食になることもある。一緒に子ども食堂に行くと、うちではあまり食べない子どもが、たくさんの量を食べていた。とてもおいしかったと言っていた。

(市民)

- ・能美市の子育て施策は充実している。それが当たり前になっている。もらって当然と思っている親もいる。愛も出すよりも、もらうものと思っているかもしれない。
- ・子どもは、子ども食堂にくると愛を感じられたと思う。大人は愛を与える側、子ども食堂でお世話をする側になれば、自分も愛を与えられると確認することができると思う。活動を続けることで、そんな人を増やしていけると思う。

4、子どもが健やかに成長する環境を作るために私たちができること、行政に望むこと

(市民)

- ・保育士をしている友人はパートや登録保育士も研修を受けて欲しいと言っていた。正規・非正規にかかわらず保育士さんは同じように子どもと接しているのに、正規の保育士は研修を受ける機会があるが、パートや登録の保育士にはその機会がない。0～2 歳から保育園に通っている子どもはたくさんいるが、保育士が足りていない様にも思う。一番、愛情をかけなくてはいけない時期であるので、0～2 歳児に関わる保育士に勉強する機会を与えて欲しい。情報を仕入れる機会が必要だと思う。

(司会)

- ・子育て支援は親支援というが、行政ができることで一番効果的だと思うのは、子どもと直接関わる保育士の質を上げることということですね。

(市民)

- ・10 年後（もっとかかるかもしれないが）子ども食堂がなくなっている社会のほうがいいと思う。今、子ども食堂に行っている子供たちが10 年後には子どもを支える側になると思う。地域の中で自分たちがされたことをどのように還元していくかを考えてほしい。社会で何かをやるきっかけづくりになって欲しい。

(市民)

- ・結婚する前に大阪で保育士をしていた。能美市には公立の保育園しかないことにびっくりした。
- ・保育士ひとりひとりの能力は高いと思う。縦割行政の影響もあるのか、もっと保育園ごとに自由に特徴のあることをやっていけたらいいのにとすることがある。現場の保育士の負担・苦労はよく分かっているが、行事などに手をかけすぎていて、子どもをみることに時間をかけることができていないと思う。
- ・子どもが遊び込めることだけにしてもらえたら十分だと思う。遊べる環境をつくり、見守るだけでも大丈夫だと思う。子供に主導権を持たせて、保育士があれやこれやとお世話をしなくてもいい環境が必要だと思う。

(司会)

- ・保育園ごとの特徴を出すことと、保育士の能力を活かすこと。先ほどの話と関連して、保育園の質を上げるマネジメントの話ですね。

(市民)

- ・市職員であるが、個人的に興味があったので子ども食堂に参加している。活動はとても

楽しい・やりがいのある活動だと思っている。子育て支援制度は他の市町と比較しても充実していると思う。愛を育てることについて、保育園の多様性について行政で何をやっているか考えていきたい。

(市民)

- ・自分が参加している子ども食堂は障がい者も健常児も関係なく集える場所である。子ども達は誰でも受け入れてくれる。
- ・もっと小学校や保育園でも障がいのある方と交流できる機会があればいい。接する機会を持つことで学べることもあると思う。いろんな人がいるということ、障がいがあっても助けがあれば地域で生活できることを学べる環境をつくってほしい。

(市民)

- ・人が行けない場所があったらダメだと思い活動を始めた。行政や学校ができないことをしていきたい。

4、振り返り

(市長)

- ・子育てに関して、大人は子どもにやってはいけないと言いつぎている。枠にはめられた子供たちが羽目をはずせるのが子ども食堂だと思う。子どもたちは自分がやりたいことをする環境を探し求めている。
- ・教育は枠にはめず、見守る環境づくりが大切である。
- ・能美市で特別なことをしようとした際、みんなに協力してもらえる。これは日々の活動で協力してもらえるような環境を作っているからである。能美市には74の町会・町内会があり、町会長が何かをしようとしたときには町民が協力してくれているはずである。それは町会長が町民のために働いていることを皆知っているからである。普段から町民同士のつながりがあるからであり、隣に誰が住んでいるかわからない地域ではできないことである。平生からの日常の付き合いが大切である。
- ・皆さんがしていることも普段していることの延長線上にあると思う。特別なことをしているわけではない。